

図書館だより

National Defense Academy Library Bulletin

2007.9.28

主な内容	頁
『防衛大学校とは何か』…… 図書館長 村井 友秀 ……	(345)
教官著書の紹介 …… 公共政策学科 石渡 哲 ……	(347)
教官著書記事の紹介 …… 機械工学科 伊藤 慎一郎 ……	(350)
「青島鹵獲書籍」の紹介 …… 図書館事務室 ……	(352)

『防衛大学校とは何か』

図書館長 村井 友秀

世界中の国で軍人はエリートである。民主主義国家でも軍人出身の国家指導者は多い。国家指導者はその国で最も尊敬される人物である。米国、英国、フランスにおいても軍人出身の大統領や首相が存在する。また、軍人は医者や弁護士と同様にプロフェッショナルと看做されている。私利私欲ではなく公益のために働く職業と社会に認められているのである。エリートは高い教養と知性を持っているなければならない。したがって、多くの国で士官学校は入学することが難しい大学の一つになっている。

日本における唯一の軍事組織は自衛隊であり、世界の常識から見ると、自衛隊の幹部はエリートであるはずである。自衛隊の幹部がエリートであることを証明する最も簡単な方



法は、多くの幹部の出身校である防大が一流の大学であることである。したがって、自衛隊の存在意義を日本社会の中で確立するために、防大として目指すべき道は、防大を一流の大学にすることである。防大は、防大生が他大学の学生に対して自分達の方が一流の大学生であると誇りを持てるような大学でなければならない。防大卒業が日本の一流大学を卒業することを意味するならば、防大卒の自衛隊幹部はエリートとして日本社会に受け入れられるであろう。

嘗て防大は大学か軍学校かという議論があったが無意味な議論である。防大は一流の大学であると同時に一流の軍学校でなければならない。大学教育を担当する教官は、エリートを教育することが出来る高い能力と識見を持つ教官でなければならない。同時に軍事教育を担当する教官は、将来のエリートである防大生が目標に出来るような立派な軍人である必要がある。一流の軍人は自分の経歴を踏まえて、軍隊と軍人の本質を学生に教えるこ

とが出来はずである。防大生がエリートであるためには大学教育と軍事教育を担う教官がエリートであることが大前提である。

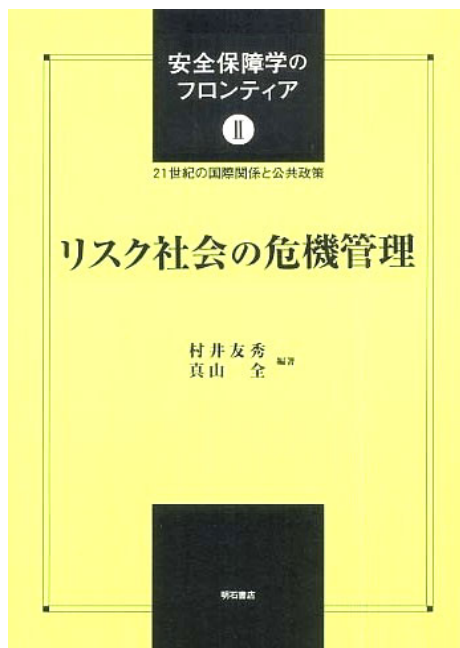
大学生としても一流であり軍人としても一流であるエリートになることを期待されている防大生は一般の大学生よりも大きな負担を担うことを要求されている。この大きな負担に耐え、エリートに相応しい学力、体力、軍人としての適性を持つ者だけが防大を卒業することを許されるのである。米国では三軍の士官学校だけではなく、パウエル統合参謀本部議長が修了した米国の予備役将校訓練コース（ROTC）に属する大学生も、常にROTCを辞めるようにという圧力をかけられ、圧力に押し潰されなかった者だけがコースを修了できるのである。誰でも卒業できるような教育機関はエリートの教育機関ではない。防大卒というブランドを高いレベルで維持し、防大卒という肩書きに誇りを持つために、防大の全ての学生と教官はエリート意識と緊張感を持って行動しなければならない。



~~~~~ 教官著書の紹介 ~~~~~

『安全保障学のフロンティア I 21 世紀の国際関係と公共政策 現代の国際安全保障』；  
『安全保障学のフロンティア II 21 世紀の国際関係と公共政策 リスク社会の危機管理』  
防衛大学校社会科学教室発足 30 周年 総合安全保障研究科創設 10 周年

著 者 防衛大学校公共政策学科・国際関係学科・総合安全保障研究科教官  
編 者 村井友秀、真山 全  
明石書店 (2007年)



公共政策学科 教官 石渡 哲

1 出版の経緯

現在防衛大学校本科課程において社会科学系の教育を担当している公共政策学科および国際関係学科（以下、「社会2学科」という）の前身である社会科学教室は昭和49年に発足したので、本年（平成19年）は発足から33年目の年である。本年は、また、2学科教官が中心になってその教育の任を担っている、

総合安全保障研究科（以下、「総合安保研」という）の教育開始から10年目の年でもある。30年以上にわたり本科学士の教育の任を果たしてきたことも、10年の節目の年を迎えることも、ともに慶賀すべきことである。

ところで、研究が教育とともに大学の本来的使命であることを考えれば、大学におけるアニヴァーサリーの事業に最もふさわしいの

は、記念論文集の出版である。

そこで、2年ほど前から社会2学科教官の間で、社会科学教室発足(約)30周年と総合安保研創設10周年を祝賀して、記念論文集を出版し、われわれの研究成果を世に問おうとの機運が高まった。そして、編者は、出版時点での、人文社会科学群長と総合安保研教務主事にお引き受けいただき、編集のための諸事務を行う事務局には、専攻の異なる武田(国際政治学)、河野(社会学)、山崎(ロシア地域研究)、武藤(経済学)それに私(石渡。法学)の5教官が就くことになった。

当初、われわれ事務局は、昨今の厳しい経済状況下で記念論文集のような採算の取れない書物を出版してくれる出版社がはたしてあるだろうか、また、論文集を編纂できるだけの数の論文が集まるだろうか等、多くの不安を抱えていた。しかし、国際関係学科・立山教授の仲介により明石書店が出版を引き受けられ、また、幸いにも(財)防衛大学校学術・教育振興会(山崎財団)から出版助成をいただくことができた。さらに、われわれにとって何より嬉しい誤算だったのは、社会2学科教官のほとんど全員と総合安保研の科目を担当する防衛学教育学群所属の教官の計28名の労作が寄稿されたことである。

28編もの論文を1冊に収録すると、非常に大部な本になってしまうので、2巻に分けて収録し、両巻とも本年3月に出版することが

できた。4月25日には、五百旗頭学校長、西原前学校長、山崎財団の北野評議員(元防衛大学校副校長)、社会2学科教官の先輩である名誉教授等のご来臨の下、出版記念パーティーを催すことができた。

## 2 記念論文集の内容

この論文集に収録されている論文は、それぞれ単独でも学術的価値を持っている。しかし、各執筆者が自己の研究テーマを安全保障という共通の視点から多角的に考察するものであるという点で、本論文集は決して単なる論文の寄せ集めではない。その内容の概略を示せば、以下のとおりである。

第1巻『現代の国際安全保障』は、ポスト冷戦期に生じた新しい脅威とそれに応じた21世紀初頭の安全保障体制の変容を多角的に分析している。第1部「新しい脅威と国際安全保障体制の変化」では、新たな驚異の発生とともに、冷戦期の国際安全保障体制が変容を迫られている様が分析されている。これを受けて、第2部「地域安全保障の新展開」では、圧倒的な国力を持つ米国の各地域での動きおよび日本を取り巻くアジア・中東の地域安全保障体制の分析がなされている。さらに、第3部「国際安全保障の歴史的検証」では、過去の安全保障体制の失敗や問題点の今日的意義が考察されている。そして巻末には学校長が本論文集に特別に寄稿された「硫黄島の戦いをめぐって」が収録されている。

第2巻『リスク社会の危機管理』は、グローバル化と技術革新に伴い多様なリスクに晒されるようになってきた現代社会の危機管理を分析している。第1部「組織と危機管理」では、企業や軍事組織の危機管理および政策決定のあり方についての理論的問題ならびにリスク社会における自衛隊の役割および政軍関係といった実践的な危機管理の問題が経営学、社会学、政治学等の学際的視点から考察されている。第2部「安全保障と経済学」では、経済生活のグローバル化と安全保障上のリスクとの関連について、最新の防衛経済学の成果を踏まえつつ、様々な角度からの分析がなされている。第3部「社会的リスクと法的秩序」では、国際犯罪や民族紛争等、グローバル化するリスクと国際法・武力紛争法との関係、あるいは国家レベルの危機管理と個人の自由権にかかわる問題、さらには個人的レベルにおけるリスク対処と法的手段による法秩序の維持・管理にかかわる問題が考察されている。

### 3 余話(1)

事務局の5名が編集のための相談を始めてすぐに私は、記念論文集、あるいはより根源的に学術書の出版についての各自の考え方が非常に異なっていることに気付いた。それは、個人の見解の相違にもよるが、むしろ各自の専門分野における学術書出版の位置付けの違いによるところが大きかったようである。正

直に言って、これほど考え方に隔たりがあるのでは、出版は無理ではないかと思ったことが、何度かあった。

しかし、皆で根気よく話し合った結果、最後には意見がまとまり、出版に漕ぎ着くことができた。もとよりそれに至るには、お互いに随分と譲歩をした。譲歩の上に成り立った事業については、当事者間に不満が残るのが世の常である。けれども今回私は、完成した2巻の論文集に大いに満足しているし、また、事務局で行われた議論(激論?)を振り返ると、すがすがしい気持ちにさえなる。これは、事務局のメンバーが、互いに敬意を抱きあい、そして、各自の見解や各専門分野のしきたりの違いを超えて、社会2学科および総合安保研の良き記念論文集を世に送りたいという気持ちを共有していたことによるものと、私は信じている。

### 4 余話(2)

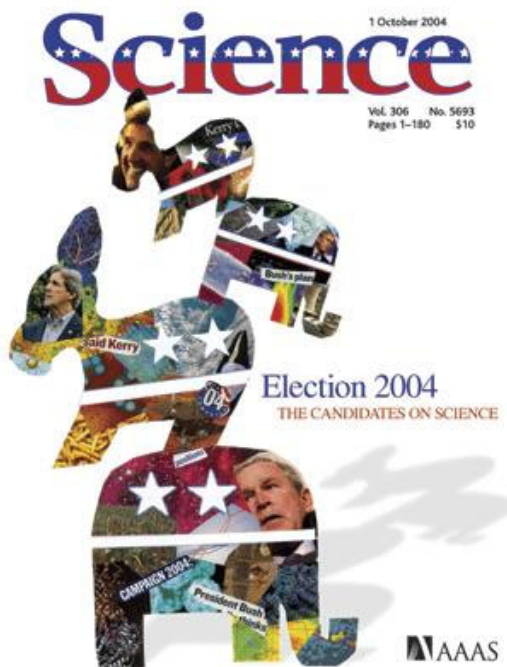
前述のように、記念論文集の出版は大学のアニヴァーサリーの事業にふさわしいものである。われわれは、社会科学教室発足20周年の際にも記念論文集『転換期の日本そして世界』(人間の科学社)を公刊した。今回再び記念論文集を出版することができた。防衛大学校の規模を考えると、ヴォリュームの点でもまた内容の点でも、われわれは自分たちの学問上の水準について自信を持っていい、と私は考えている。

しかし、学問は繊細な生き物に喩えることができ、個々の研究者もファカルティーも、精進を怠れば、それまでの研究成果は瞬く間に壊死してしまう。防衛大学校の教官も常に研究に邁進しなければならない。そして、節目ごとにその成果を世に問うことは、われわれ一人一人にとってのみならず、防衛大学校の存在を世にアピールする上でも、大変に意義深いことである。それゆえ、社会2学科の

教官の中で（残念ながら？）高齢者の部類に属する私は、今後も学群、学科あるいは研究科の節目ごとに後輩諸氏の手によって記念論文集が編纂されることを、切に望むものである。もし今後われわれが努力を怠れば、20周年記念論文集や今回の論文集は、いわば雑草に覆われ苔生して忘れ去られた記念碑のような、哀れな代物になってしまうであろう。（了）

~~~~~ 教官著書記事の紹介 ~~~~~

『世界を制するスッポン泳法』



Science Vol.306 (2004年)

機械工学科 教官 伊藤 慎一郎

スッポン泳法？何のことだと思われる方も多いと思われる。スッポン泳法は筆者がスッポンの泳ぎを観察し理論的に生み出した最速の

クロール泳法の俗称である。水泳種目はクロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライと大きく4つに分かれるが、競泳においてその詳細な内容はまだ進化過程にあると筆者は考えている。そのクロール泳法で、理論的に導き出され、実証された最速の泳法がこれから解説するスッポン泳法である。これに関しては英文科学雑誌 Science 誌 (Pulling Straight to the End of the Pool, Science Vol.306, p43, 2004) にも紹介されている。

さて生物の動きは大きく分けて最大速度運動と最大効率運動の 2 種類に大別できる。前



図 1 スッポン

者は餌を捕まえるとき、敵から逃げるときに必死の移動動作である。後者は平常時の運動であり、エネルギー消費が最も少ない動作である。人間に当てはめるなら、全速力の走りが最大速度運動であり、普通の歩きが最大効率運動である。図 1 に示すスッポンは河川や湖、池沼等に生息する沼亀達と同様の亀の仲間であるが、殆ど水中で生活するために泳ぎに適した形状になっている。手足にはヒレがつき、甲羅は薄く扁平で、いわゆる流線型をしている。そのスッポンは最大速度運動では 1 秒間に体長の約 2 倍の速度で泳ぐ。100m 自由形の世界記録は身長 193cm のオランダ、ファンデンホーヘンバンド選手の 47 秒 84 であるから、この場合毎秒体長の 1.08 倍のスピードとなる。スッポンが人間と同じ身長ならば、そしてオリンピックに出られるならブチ抜きの 1 位ということになる。筆者は観察したスッポンの泳ぎを数式化し、速度、エネルギー等を計算してみた。得られた結果からは最大速

度運動と最大効率運動が得られ、かつ観察結果の動きとほぼ一致したのである。同じ数式を使って人間の自由形を計算すると、同様に最大速度運動と最大効率運動の結果が得られた。最大効率運動は意外なことに現在自由形主流の S 字泳法（手のひらを身体に対して S の字を描く泳法、図 2(b)）を示した。無駄のない泳ぎ=泳ぎの達人=競泳選手の発想がバックグラウンドにあって現在の隆盛になったと思われる。計算で得られた最大速度運動は、筆者がこの泳ぎを世界に発表した 2002 年当時、破竹の勢いだったイアン・ソープ選手の泳ぎ方と見事に一致した。彼はゆっくり泳ぐのになぜか速いという、当時としては不思議な泳ぎ方だったのである。これらの泳ぎを図解すると図 2 のようになる。これらの泳ぎ方の違いは、手のひらからの推進力の発生機構の違いで、S 字泳法は水を斜めに切るようにして揚力を、スッポン泳法は水をまっすぐに押す抗力を主の推進力としているところが異なっている。その後、生理学的にもスッポン泳法は 200m 以上の距離では有利であることが確かめられた。人間は理性があるがゆえに、本能本来の動きを変えてしまった。競泳ではもう一度、本能に立ち戻ってみるべきである。北京五輪で 200m 以上の自由形ではメダルを制するのはスッポン泳法泳者だと筆者は確信している。

※図 2 (a),(b)は次ページに掲載

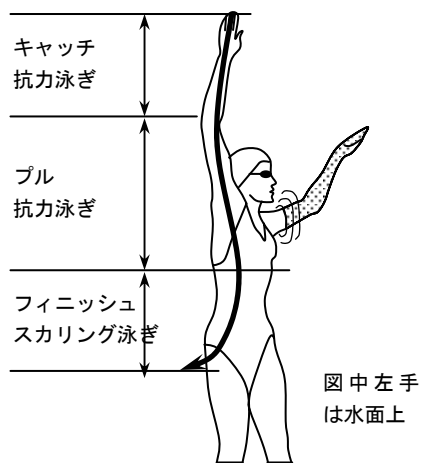


図 2(a) 最速,スポン泳法のかき方.
手のひらは進行方向軸に直角的に動かす. I 字
プルと命名. ローリングのため緩やかな S 字

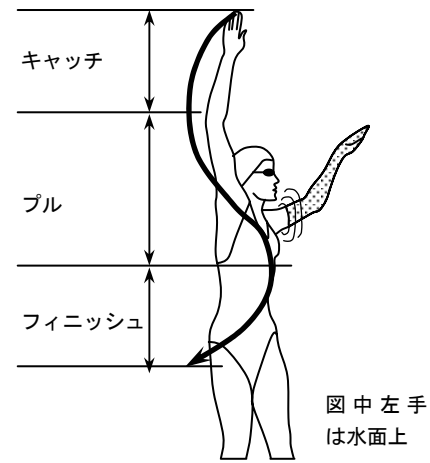


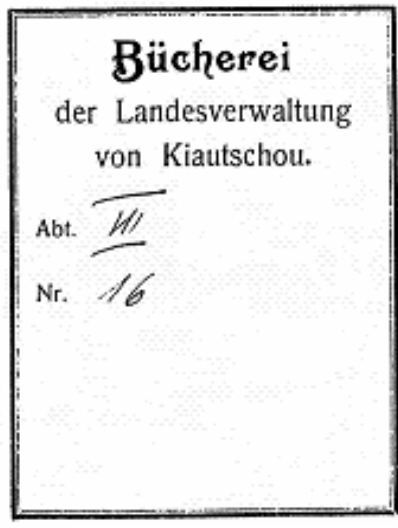
図 2(b) 自由形の一般的な手のひらのかき方
手のひらは身体から見ると S 字を描い
ているため, S 字プルと呼ばれる。

~~~~~ 「青島函獲書籍」の紹介 ~~~~~

図書館事務室



膠州図書館蔵書票



膠州総督府蔵書票



徳華大学図書館蔵書印



膠州図書館蔵書印

「青島函獲書籍」の受入印、蔵書印及び蔵書票



## 1. 青島鹵獲書籍の経緯(はじめに)

第 1 次世界大戦における日独戦争の後、様々な「戦利品」や膨大な資料が日本におくられた。その中で、膠州図書館、徳華高等学校、膠州総督府及び青島裁判所などが所蔵していた約 27,380 冊(現確認数)の書籍が含まれていたもので、この書籍が「青島鹵獲書籍」と言われるものである。その後、日本国内で分配移管され今日に至っている。

現在、この書籍の保有が確認されているところは、東京大学他 24 機関である。この中に防衛大学校も含まれている。防衛大学校への移管経緯としては、陸軍予科士官学校に所蔵されていた書籍が埼玉県立図書館を経由したものと、陸軍経理学校の所蔵本が一橋大学を経由したものである。現在、本校図書館に 144 冊の保有が確認されている、表記の印影は当時のドイツの管理受入印、蔵書印及び蔵書票で鹵獲書籍を確認する際に役立っている。

## 2. 防衛大学校図書館の保有「青島鹵獲書籍」

### 144 冊の分類について

書籍の分類については、地理及び地誌(83 冊)、歴史(23 冊)、国防・軍事(10 冊)、宗教・東洋思想(各 5 冊)、社会・経済・伝記・教育(各 3 冊)、政治・民俗学(各 2 冊)、法律・言語(各 1 冊)である。その中で大半を占めているものが地理及び地誌で半数がアジア地域の地誌、次いでヨーロッパ及びアフリカである。

また、歴史についても割合として地理及び地誌と同様である。国防軍事については、独逸軍糧食規定等当時の軍規が主である。宗教は、キリスト教と仏教で 2 分される。東洋思想については、中華思想が半数を占め、インド、日本のものがある。その他は当時の自国についてのもので、経済及び法律については、植民地の経営、土地租借権法等がある。以上の分類から当時の日本陸軍の「青島鹵獲書籍」については、他国特にアジア地域についての地誌並びに歴史について関心があったことがうかがわれる。また、当時の陸軍経理学校の所蔵としては、他国の戦時糧食についての軍規など保有したことも推察されるところである。

## 3. あとがき

今回紹介した「青島鹵獲書籍」については、防衛大学校図書館に在籍した安達将孝氏(昭和 31-58 年)が『第一、二次世界大戦における日本軍接收図書』(「図書館界」Vol33.2,p68-75(1981.7))で報告されたものである。現在は、金沢大学文学部ドイツ文学科:志村 恵 准教授を中心にした研究グループにより国内追跡調査研究がなされているところである。今後、本校図書館で確認が取れている「青島鹵獲書籍目録」を本校図書館校外ホームページに掲載する予定である。

図書館事務室 飯島 幸夫

## ~~~~ お知らせ ~~~~

今回の号から「図書館だより」について電子化により印刷数を縮小しました。つきましては校内の皆様方には代表者宛で配布するようになりますので、紙面が必要な方は防衛大学校ホームページを参照の上、プリンターにより印刷して下さい。

(防衛大学校 図書館「図書館だより」ホームページ URL は以下の表記でご利用下さい。

<http://www.nda.ac.jp/obaradai/tosyokan/nadal.html>)

印刷所

防衛大学校 図書館事務室

「図書館だより」事務局 Tel. 046-841-3810

〒239-8686 神奈川県横須賀市走水 1-10-20

---

NADAL Bulletin Vol. 22, No. 1

防衛大学校図書館だより 2007.9

発行所及び発行人

〒239-8686 神奈川県横須賀市走水 1-10-20

防衛大学校図書館 Tel. 046-841-3810

図書館長 村 井 友 秀

編集委員

阿 部 洋 (機能材料工学科)

久保田 徳 仁 (国際関係学科)

田 中 誠 (国防論教育室)

編集庶務

北 村 孝 一 (図書館事務室)

飯 島 幸 夫 (図書館事務室)